



走って、話して、凍えて、撮って 2024年度北欧滞在記

東京理科大学 教養教育研究院 神楽坂キャンパス教養部 准教授

なか まる てい こ
中丸 禎子

滞 在 地：スウェーデン ウプサラ

在 外 先：ウプサラ大学

滞在期間：2024年4月1日～2025年3月31日

■スウェーデン・ウプサラ

2024年。その年は春が遅く、降り立ったウプサラはマイナス2度、翌日には雪が積もった。2020年度に行くはずが、コロナで渡航2週間前に中止となった在外研究のスタートだった。大学院博士課程在学中に、「客員博士候補生」としてドイツのベルリン・フンボルト大学（2007年度に1年間）に続けて2008年度に7か月間滞在したのが、北欧最古の「ウプサラ大学」だった。教員として就職する直前の2011年には「客員研究員」として2か月滞在した。わたしは本学でドイツ語の授業を担当する「ドイツ文学者」で

あると同時に、スウェーデンを中心に北欧の文学研究を専門とする。研究には、書籍を読むことはもちろん、現地に足を運んで気候や匂いを体験し、風景の中に身を置き、現地の人たちと交流することが——必須ではないかもしれないが、自分だけでは考えつかない方向に研究を進め、研究の質を高めるためには不可欠だ。スウェーデンに1年間滞在して四季を経験することは、わたしの念願だった。

■科研費国際共同研究加速基金

わたしが在外研究に派遣されるためには、クリアすべき課題がいくつもあった。その解決に大いに役立つ



文学部。「トゥンベリ通り」にある。名前の由来は江戸時代に来日したスウェーデンの植物学者カール・ベーター・トゥンベリ（ツンベルク）。『日本植物誌』（1784）は欧州最古の日本植物図鑑。

たのが、「科研費国際共同研究加速基金」(申請時の名称は「国際共同強化(A)」)だ。科研費の「基課題」を持つ研究者のみに申請資格があり、採択率は約3割という狭き門だが、採択されれば約1500万円が支給され、書籍や旅費だけでなく、住居費や授業代講費にも充てられる。定められた期間内に在外研究を開始することが使用条件であり、採択された場合には大学側に派遣に向け調整する義務が生じるため、本学では派遣順に従い上司の決裁を経て申請する。自分が置かれた状況を考えると、この資金なくして渡航は不可能だった。申請書作成により、渡航前・現地・帰国後の研究計画が早い段階で具体化したのも良かった。申請・採択・派遣に向けて、影日向に応援してくれた共同研究者たちには、心から感謝している。研究課題「近代日本とドイツ・北欧の思想・文化交流：北欧作家ラゲルレーヴを中心に」がこうしてスタートした。

■最新研究のインプット

スウェーデンで実施したのは、資料収集・現地研究者との交流を通じた、最先端の研究のインプットと、自分がこれまで日本語でしてきた研究のアウトプット、そして、今後の研究の発展に向けた準備だ。インプットのため、現地研究者と個別にアポイントを取って打ち合わせを重ねたほか、ゼミナールに参加した。所属先である文学部では、週に2回の全体ゼミのほか、関心が近い人たち同士のグループで実施するテーマ別のゼミがある。わたしは全体ゼミに加え、「環境」と「ジェンダー」のグループに参加した。スウェーデン人の発表は、写真や絵画など視覚資料が対象の発表をのぞき、スライドを使わないことが多い。週に2回、スウェーデン語で十数ページの論文を予習し、発表とディスカッション併せて2時間を集中して理解するのは大変だった。外国人研究者の大半は英語で発表したが、その発表を聞いて気づいたことがある。きれいなスライドを使って上手なパフォーマンスをする人もいれば、たどたどしい英語で言葉に詰まりながら発表する人もいる。しかし、評価されるのは、パフォーマンス的な発表や英語が上手な発表ではなく、内容が豊かな発表だった。わたしは日常生活も研究言語も、一年間全てスウェーデン語で通した(身も心もスウェーデン人になるため、米を食べないとも決めていた)が、研究者だけでなくお店の人や道行く人も、英語のHelloではなく、スウェーデン語でHej(ヘイ)!と話しかけると、外国人であってもスウェーデン語で返して

くれる。わたしのスウェーデン語が下手でも真剣に聞いてくれたし、一度で通じなければ言い直してくれた。外国人として嫌な思いはそれなりにしたが、言葉の面で嫌な思いをすること——たとえば、なまりや間違いを笑われたり、話せないという理由で避けられたりする経験は一度もなかった。

■自分の研究のアウトプット

在外研究中、わたしは日本語で大きな二つの仕事を抱えていた。夏至の日に刊行された一つ目の成果『巨人フィンの物語 北欧・日本 巨人伝承の時空』(三弥井書店)は、スウェーデンの民話絵本と学術解説をセットにした、渾身の一作だ。対象であるスウェーデン南部スコーネ地方(1658年までデンマーク領)の巨人伝承は、北欧神話にルーツがある。キリスト教時代にヨーロッパ大陸でキリスト教説話となり、ノルウェーから北欧各地に伝播した。ノルウェー版は英語訳されて大正時代の日本に伝わり、民話『大工と鬼六』として定着した。また、元になった北欧神話は諫山創『進撃の巨人』の着想元でもある。2023年の調査旅行の成果でもあるこの本を、わたしは英語概要をつけてスウェーデン人たちに献呈した。また、『大工と鬼六』関連を2024年9月にデンマークの学会で英語発表、全体を2025年2月にウプサラ大学文学部のゼミでスウェーデン語発表、『進撃の巨人』関連を3月にフランスの学会で英語発表した。北欧語や英語の速読や資料収集の点で現地の研究者に分がある中で、わたしは、自分の強みである日本語・日本文化についての知識を動員し、日本と北欧の思想・文化交流に焦点を当てることを心がけた。

二つ目の成果は帰国後に刊行した『北欧ロマンとナショナリズム 内村鑑三・開拓・民族主義』(勉誠社)だ。内村鑑三『デンマルク国の話』(1911)を軸に、「幸せな北欧」の成立過程と実体を、北欧・日本・ドイツの宗教・思想・文学・歴史を通じて検証する論文集だ。スウェーデンにいて、舞台となった場



スコーネ地方ルンド大聖堂にある「巨人フィンの柱」。教会を作った巨人が石化したと伝わる。

所での現地調査が容易になった。内村鑑三が描いた植林の舞台であるデンマークのユトランド半島ヴィボーでは、二つの発見をした。一つは、当日は強風で電車が止まったためバスで向かい、ずいぶん遅れて到着したのだが、調査先「デンマーク・ヒース協会」の人たちは「ヴィボーあるあるだよ」と笑っていた。『デンマルク国の話』は、19世紀にデンマークが敗戦した際、工兵士官ダルガスが植林により国土を回復したとする物語である。まっすぐ歩くのが困難なくらい強い風を受け、植林が何よりもまず防風の価値を持つことを実感した。もう一つは、他の都市と街道を結ぶ大きな道路が、ダルガスの事業の成果として紹介されたことだ。現地のダルガスは、豊かな自然を守ったからではなく、人工的に木を植え、道路を作って暮らしを豊かにしたからこそ今も評価されていた。本や映像から、ユトランド半島の自然が厳しいことは知っていたが、風に吹かれたり、寒さに凍えたり、眩しい太陽に目の痛みを覚えたりすることで実感した、新しいデンマークの姿だった。2025年2月にベルリン・フンボルト大学の特別授業枠を使い、ドイツ語で本の内容を発表した。発表を依頼したのは2007年留学時の受け入れ教員で、現在の研究テーマ「身体表象」「ジェンダー」の着想を与えてくれた先生である。定年退職を控えた先生に恩返しをし、母校に錦を飾ることができたのが嬉しかった。

■グリーンランドとラップランド

せっかくヨーロッパにいて、まとまった時間が取れる一年間。調査旅行・出張、そして観光旅行にも意識的に出かけた。特に印象に残ったのが、デンマークの

自治領グリーンランドと、スウェーデン北部ラップランドだ。小さな北欧都市も魅力的だが、圧倒的な自然の中で、自分を小さい存在に感じるのが気持ちよかった。前者にはイヌイット、後者にはサーミが暮らしている。最近着手した先住民表象研究を、今後は北極研究につなげるという着想を得た。

■遅いランナーと一番遅いランナー

スウェーデン滞在でしようと思っていたことがもう一つある。「ランナーとして復活する」こと。わたしは中学生のころから趣味でジョギングをしていたが、就職後は忙しく、走らないでいるうちに、走れなくなり、無理をして少し走れるようになったら故障して…を繰り返してした。気分一新、「毎日10キロ走り、フルマラソンも3度完走した過去の栄光」は忘れ、「市民マラソン大会に参加し、短い距離で良いので完走する」という目標を立てた。ある程度練習してからエントリーしようと思っていたところに、文学部のメーリングリストで献血を啓蒙するため各都市を巡回する「献血マラソン」の情報が舞い込んだ。距離ごとに「速く走るランナー」「ゆっくり走るがタイムは測定するジョガー」「タイムを計らず歩くウォーカー」のカテゴリーが設けられ、参加しやすそうだ。5キロ（ジョガー）にエントリーしたところ、目標タイムより5分も速くゴールでき、味を占めて毎日5キロ走るようになった。11月の「ひげマラソン」では、この時のタイムを更に5分更新できた。

マラソンと日本とスウェーデンには、実は深い関りがある。ストックホルムで開催された第5回オリンピック（1912）に、日本は初めて二名の選手を派遣し



ラップランド地方アビスコのオーロラ。サーミ語で「ガチョウ谷」を意味する山にて。通信障害が起こるほど強い太陽フレアのため、強い光が見えた。



グリーンランドは陸路で村同士の移動ができないため、タシーラックという街を拠点に漁船で色々なところに行った。7月だが海には氷が浮かんでいる。



左は献血マラソンの景品であるTシャツと走る血液ちゃんメダル。スウェーデン語のBlodomloppetは「献血のための競技」と「血液の循環」のダブルミーニングだ。右はひげマラソンの景品であるTシャツと木のメダル。ひげをつけて走る大会だが、わたしはタイムを狙っていたので顔ではなくTシャツに貼った。

た。マラソンの金栗四三は活躍が期待されたが、レース中に熱中症で倒れてしまう。その後もオリンピック選手として好記録を残す機会には恵まれなかったが、選手引退後も日本のマラソン振興に貢献した。50年後、スウェーデンのオリンピック委員会の調査で、金栗が棄権の手続きをしていなかったこと、つまり、書類上は、まだ走り続けていたことが判明する。1967年、出走したまま帰れなかったストックホルムのオリンピック・スタジアムで金栗はゴールテープを切った。「54年8ヶ月6日5時間32分20秒3。これをもって第5回ストックホルム・オリンピックの全日程を終了する。」北欧の過度な理想化は、わたしの批判対象であり、この物語には、日本人を奇異な目で見る視

線も存在している。しかしわたしは、「一番遅いランナーが戻ってくるまでオリンピックは終わらない」という考え方が好きである。

■過去のわたしと未来のわたし

1年間に、新たな研究者たちとの出会いのほか、旧交を温める機会もあった。特に印象的だった二つを挙げたい。一つ目は、研究内容もたたずまいも凛として格好良い憧れの先生と、今後の研究成果発信について話した時だ。発表言語の話題になり、スウェーデン語で発表したいという希望を述べたところ、「英語で発表すべきだ。スウェーデン人も英語は読めるし、あなたの研究は世界中の人が読む価値のある研究だ」という言葉をいただいた。もう一つは、オリンピックのマラソンコースを歩いた時に、ある駅を通りかかった。その時まで忘れていたが、2011年の滞在時に自宅に招いてくれたスウェーデン人の家の最寄り駅だった。お年を召したその人は、再会できないまま2020年に亡くなった。駅を見たとき、その人が杖代わりにクロスカントリーのストックをついて迎えに来てくれた姿、その日の冷たい空気、その時間の柔らかい日差しを思いだした。そこには、研究者として評価され、多くの人にかわいがられ、応援され、人間として愛された、過去のわたしがいる。それは、スウェーデンで色々な人と再会し、新しく出会い、スウェーデン語を勉強し、様々な場所を歩かなければ会えなかったであろう、未来のわたしでもあった。

2025年の春は早く来た。例年より1か月早く満開になった桜に見送られ、ウブサラを後にした。



1912年に建設されたオリンピック・スタジアム。マラソンのスタート兼ゴール。3月に、マラソンの折り返し地点（モニュメントが立ち、説明板に金栗のことが書かれている）からスタジアムまで歩いてみた。



ウブサラ中央駅から空港に向かう直前に、県庁前で撮った桜。スーツケース23キロ、バックパック23キロ、機内持ち込み手荷物8キロのため、良いアングルで撮ることはできなかった。

